平成３０年度　東濃地区教育推進協議会　小学校　実践交流発表資料

生活科　恵那市立長島小学校　塚本　恵理

1 研究主題について

(1)研究主題　「学習対象や自分自身との関わりを強め、生活を豊かにしようとする児童の育成」

～仲間と共に、気付きの質を高める指導の在り方～

(2)主題設定の理由

本校の児童は、小学校とこども園でおもちゃフェスティバルの交流や一日入学時の授業参観など、入学以前から長島小学校への関わりをもった児童がほとんどである。そのため、小学校を身近に感じる児童が多い。入学してからは、何事にも意欲的に参加し、楽しんで活動したり、同じこども園出身でなくても仲良く遊んだり、粘り強くやり切ったりすることができる。しかし、仲間と協同して深めていく学習については弱さが見られた。これは、仲間の考えや意見を聞いて、自分の考えを深めることや積極的に仲間へ伝えようとする意欲の弱さが見られるという、学校全体としての課題と一致している。よって、学習対象や自分自身との関わりを強めることで、興味関心をもち、進んで学習を行うことができ、よりよくするための方法を意欲的に考えられるようになると考えた。また、仲間と学ぶことで新しい発見や無意識の意識化など気付きの質を高められるとも考えた。

(3)願う児童の姿

・学習対象や自分自身との関わりを強め、主体的に学ぶ子。
・願いを達成するために試行錯誤をしながら、表現することを楽しむことができる子。
・仲間と活動することを通して、気付きの質を高め合える子。

2 研究内容について

(1)研究仮説

児童のもつ願いを達成できるような、学習対象と繰り返し関わる活動を位置付けた単元指導計画や、試行錯誤する場面を効果的に位置付け、気付きの質を高める指導・援助の工夫をすれば、児童は進んで仲間のよさを取り入れたり、学習対象と関わったりすることができ、生活を豊かにしようとする児童を育成することができる。

(2)研究内容

①児童のもつ願いを達成できるような、学習対象と繰り返し関わる活動を位置づけた単元指導計画

ア　学習対象と繰り返し関わる活動を位置付けた指導計画

イ　児童の多様な気付きを明確にした指導計画

②試行錯誤する場面を効果的に位置付け、気付きの質を高める指導・援助の工夫

ア　仲間と積極的に話し合う意識をもつことができる工夫

イ　自分の生活へつなげる手立て

ウ　繰り返し関わることで気付きの質を高める手立て

3 実践事例

(1)研究内容①　児童のもつ願いを達成できるような、対象と繰り返し関わる活動を位置付けた単元指導計画

ア　対象と繰り返し関わる活動を位置付けた指導計画【実践事例①　単元名『がっこうだいすき』】

本単元では、学校の施設や通学路にあるものを見つけたり、そこにいる人と触れ合ったりすることを通して、学校に自分の居場所を見つけ、安心して学校生活ができるようにすることをねらいとしている。学校での生活は様々な人や施設と関わっていることに気付き、学校の施設の様子や学校生活を支えている人たちについて進

んで考えられるように、繰り返し関わることができるような指導計画を立てた。学校探検におけるねらいと視点は次のようである。

第1次「みんなでがっこうをあるこう」
２年生の児童に案内されて校舎内を見て歩くことを通して、施設や人に関心をもち、学校生活で必要な場所や安全に気を付ける場所があることに気付くことができる。
校舎内の施設、学校生活で必要な場所があることに気付く。

第2次「ともだちとがっこうをたんけんしよう」
自分が興味をもった場所を探検をることを通して、その役割について調べ、学校の施設の様子に気付くことができる。
学校には、多くの教室や特徴的な物があり、多くの人がいることに気付く。

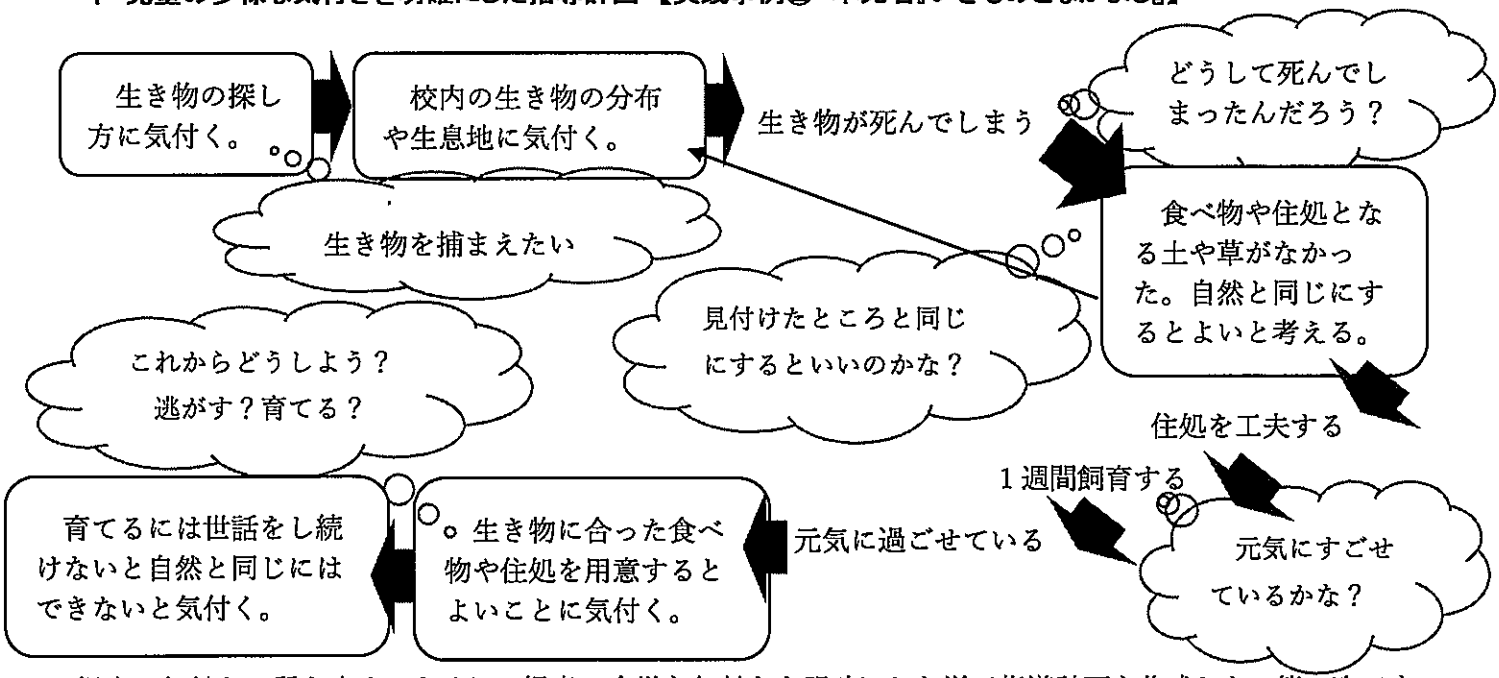
第3次「がっこうにいるひととなかよくなろう」
学校にいる人に質問したり関わったりしたことを交流することを通して、自分たちの学校生活を支えてくれる人がいることに気付くことができる。
小学校では自分たちのために仕事をしてくれる先生たちがいることに気付く。

【児童の様相】

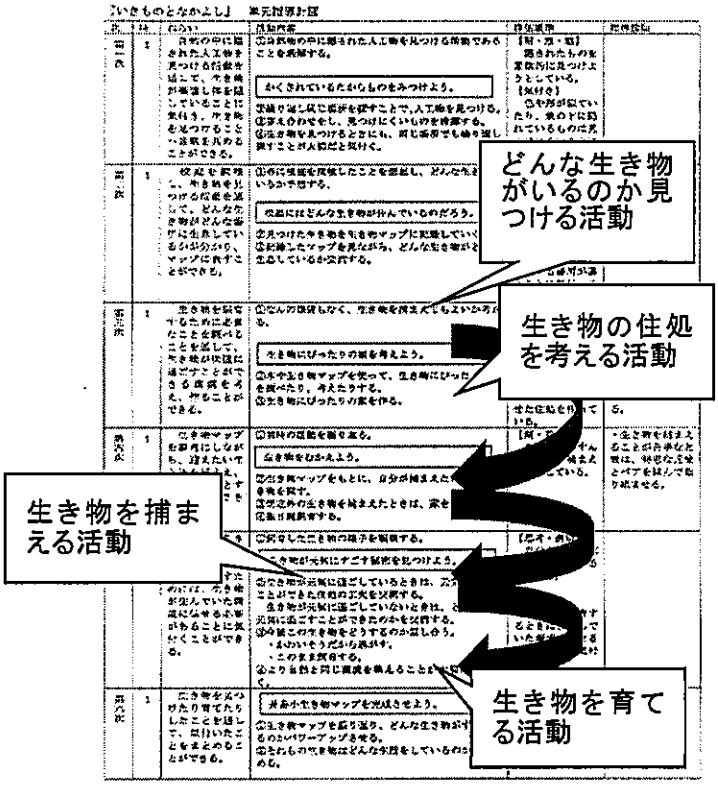
第１次	**この学校探検ではじめて校舎内を探検することもあり、興味深く探検することができた。** ２年生に案内してもらう中で、じっくり見たい、もう一度行ってみたい場所が出てきた。
第２次	**１年生だけで学校探検を行い、前回見逃してしまった場所を見たり、どんな物が置いてあるのかを見つけたりすることができた。** 児童は学校には多くの大人がいることに気付いていた。
第３次	**学校の先生に会いに行き、先生の名前やどんな仕事をしているのかを調べることができた。** 児童は先生の名前と仕事をインタビューしながら、先生と校舎のどこで出会ったのかを覚えてきている。前時までの学校探検において学習した教室と物、そして先生を結びつけながら考え、深める姿が見られた。

このように、見学や体験のねらいや視点を変えながら繰り返し学校探検を行う活動を指導計画に位置づけることで、児童の願いを達成する機会が増え、深く追究することができるようになったと考えられる。

イ 児童の多様な気付きを明確にした指導計画【実践事例② 単元名『いきものとなかよし』】



児童の気付きの質を高めるために、児童の多様な気付きを明確にした単元指導計画を作成した。第２次ですでに生き物を捕まえてきた児童がいたが、住処を整えていなかったために、死なせてしまい、悲しい思いをした。そのことから、「(種類の違う生き物は) 違う虫かごに入れないといけなかった」ことや「食べものが無かったから死んでしまった」という事に気付くことができた。捕まえたいという気持ちが先行してしまっていたが、児童はまず虫を育てるための環境を作ることが大切だと気付き、生き物の住処づくりをすることへつながった。



図表１　「いきものとなかよし」指導計画

第４次で捕まえた生き物を第３次で作った家で１週間育てた。どの生き物も環境が整っていたこともあり元気に過ごすことができていた。第５次では、生き物の住処を観察カードで記録することで、土や草を入れた事実とその理由を結びつけ整理し、生き物のために様々な工夫をすることができていると気付くことができた。また、「水をあげたほうが喜ぶんじゃないかな」「もっと土を入れた方がいいんじゃないかな」などカードを書きながら、新しい工夫も考えていた。さらに、新しい工夫を交流することで、仲間が自然に近い環境で育てようとしていることに気付き、よりよい住処にするために住処をレベルアップさせたいと願いをもつことができた。そして、生き物と長く関わることで、虫が苦手な児童も「このまま飼いたい」と言えるほど、愛着をもつことができるようになった。

また、「今後、生き物をどうするのか」と問いかけたとき、「このまま飼いたい」という児童と「逃がしたい」という児童に意見が分かれ、話し合いをした。「逃がしたい」という児童は「かわいそう」「育てることが大変」という意見がほとんどであった。作った住処を振り返らせると、草は入れたが１週間そのままの状態だったり、水も濁っていたりするなど、作りっぱなしの状態であったことに気付いた。自然の状態に近づけるのは大変と感じた児童は生き物を逃がし、それでも環境を整えて育てたいという児童は土を増やしたり、草を根ごと植えたりといった工夫をし、さらに住処を生き物が住んでいた環境に似せることができた。

このように、教師が児童の多様な気付きを明確にもつことで、児童の願いや思いを実現する活動を仕組むことができ、児童がより深く考え、自然に近付けた住処が生き物にとってよい環境であると気付くことができたと考える。

(2)研究内容②　試行錯誤する場面を効果的に位置付け、気付きの質を高める指導・援助の工夫

ア　仲間と積極的に話し合う意識をもつことができる工夫　【実践事例①　単元名『がっこうだいすき』】

本時のねらいは「学校にいる人に質問したり関わったりしたことを仲間と交流することを通して、自分たちの学校生活を支えてくれる人々がいることに気付くことができる。」である。校舎内の地図（写真１）に調べてきた先生の写真を貼りながら、先生の名前、仕事、よくいる場所について仲間に伝える活動を行った。児童の実態から、仲間の意見を積極的に聞き合う環境を整えるために、少人数グループの活動を取り入れた。一人で１人の先生について調べ、５人の仲間に紹介していく。しかし、１０人の先生について話し合うため、どのグループでも、名前も仕事もどこにいるのかも分からない先生が数名残ってしまった。自分の知らない先生について知るためには、他のグループの仲間の発表を聞く必要が生まれ、仲間と交流することへの必然性をもたせるようにした。交流の中で、児童は初めて聞く先生の名前や知らなかった仕事を知ったり、出会った情報を持ち寄って校舎のどのあたりによくいるのかを考えたりすることができた。

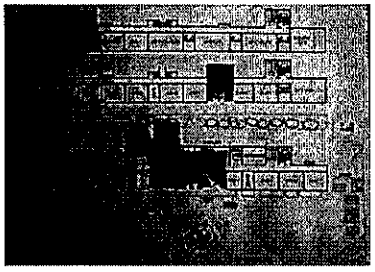


写真１　授業で活用した教具

イ　自分の生活へつなげる工夫【実践事例①　単元名『がっこうだいすき』】

本時のねらいである、自分たちを支えてくれる人がいることに気付かせるために、「長島小学校の先生たちは、だれのためにこんなしごとをしているのかな」と深めの発問をすると、児童は「みんなのため」と答えていた。

授業の終末で児童は「べんきょうをがんばりたい」「ありがとうといいたい」などみんなのためにいろんな仕事をしてくれる先生たちのために自分たちができることを考えることができるようになった。その後、配膳員の方が給食のワゴンを運んでくれるのを見かけるとお礼を言ったり、出会ったときに進んで挨拶をしたりできる児童も増えてきた。

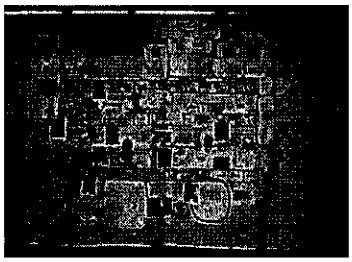


写真２　学校探検地図

写真２の学校探検地図は、児童が各教室で見付けてきたものの絵と先生の写真を貼って掲示している。また、活動の終末で行った学校クイズも合わせて掲示し、単元が終わっても進んで関わることができるような工夫をした。児童はクイズを見たり、お昼の放送で流れる先生クイズに積極的に答えたりするようになった。「しょくいんしつにいるから、〇〇せんせいだよ」「くさをぬいてくれるから、〇〇せんせいかな」など、自分たちが調べたことをもとにしながら、クイズの答えを考える姿が見られるようになった。ある児童は、「〇〇せんせいとぼくのおじいちゃんは、なまえがにているよ」と話すなど、主体的に身近なものと学校生活をつなげることができた。

ウ　繰り返し関わることで気付きの質を高める手立て【実践事例②単元名『いきものとなかよし』】

「いきものとなかよし」の学習の導入として「カモフラージュ」という活動を仕組んだ。「カモフラージュ」とは、自然の中に隠した人工物を探すという活動であり、児童は花壇や校庭の草むらに隠されたぬいぐるみやひも、おもちゃの虫などを探した。児童は繰り返し同じ場所を探すことで、「緑色のかっぱ（のぬいぐるみ）が葉と同じみどりだからわかりにくかった」など、自然と同じ色のものは見つけにくいことに気付くことができていた。終末の全体交流では、校庭には様々な生き物が生息していることに気付いていた。なぜ、生き物が一部の場所で多くみられたのかを問いかけると、児童は「バッタは緑色だから、葉っぱの中だと隠れられる」、「食べ物がたくさんあるから」、「似ている色だから、人間やほかの虫に見つからない」など、生き物の体の色と生息環境の色を比較し、生き物にとって身の安全を守るために有効な住処となっていることに気付くことができた。今後どうしたいかと児童に問うと、「捕まえたい」「増やしたい」など飼育することに興味をもち、次へとつなげることができた。その気付きをもとに、第２次や第４次の活動では、同じ場所を繰り返し探したり、生き物が隠れていそうな葉や根の近くをじっくり見たりすることで、生き物を見つけることができるようになった。

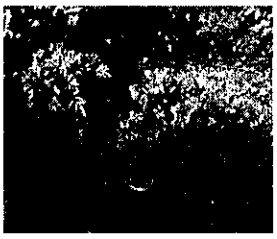


写真３　カモフラージュをする児童

4　成果と課題

〇同じ対象と繰り返し関わる活動を位置付けた指導計画を作成したことにより、対象との関わりが増え、児童の願いを達成する機会を増やし、対象との関わりを強めることができた。また、教師が児童に気付かせたいことを明確にもつことで、児童が試行錯誤を通して気付きを得るための手立てを明確にすることができた。

〇試行錯誤する場面を効果的に位置付け、仲間との交流や対象と繰り返し関わる活動を工夫することで、児童が進んで活動に参加するだけではなく、学習が終わった後も対象と関わろうとするなど自分の生活を豊かにしようとする姿へつなげることができた。

●学習活動が多様であり、児童の学習の進度も様々である。学習状況を的確に捉え、児童の実態に応じた気付きの質を高めるための手立てや見届けの工夫が必要である。

5　課題克服のための今後の方向

児童の多様な気付きをさらに精査し、気付きの質の高まりを教師が見届けたり、児童自身が振り返ったりすることができるようにしていく。